

龍井孝行全集

第十卷

瀧井孝作全集 第十卷

定価四八〇〇円

昭和五十四年六月十五日印刷

昭和五十四年六月二十五日発行

著者 瀧井孝作

発行者 高梨茂

印刷者 青木勇

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一八―七

電話(五六一)五九二一

振替東京二二三四

©一九七九 検印廃止

瀧井孝作全集
第十卷

目次

能の話	一一
第五十七回芥川賞選評	二六
松山行	二八
縫合せの貝	三四
佐渡の能面	三七
四十五年の昔	四三
古拙微笑の美術	四五
靈感の宝庫	五四
第五十八回芥川賞選評	五九
翁草	六一
福田家の人達	六四
世阿彌の「求塚」と漱石の「心」	八五
第五十九回芥川賞選評	九二
廣津さんを惜む	九四

仏者六花翁

九九

第六十回芥川賞選評

一一一

将棋の部屋

一一三

書きにくい少年時代

一一五

第六十一回芥川賞選評

一一六

第六十二回芥川賞選評

一一八

第六十三回芥川賞選評

一二〇

まだ丈夫な私の歯

一二二

芭蕉の句

一二六

朝富士・夕富士

一二八

波郷の俳句

一三二

第六十四回芥川賞選評

一三八

ほととぎすの句など

一四〇

第六十五回芥川賞選評

一四二

五十年前の思出

一四四

『夜の光』

一四七

志賀さんの奥さん

一四八

叱られる

一五五

むかしの思出	一六一
志賀さんの書	一六四
市谷加賀町訪問	一七〇
足柄海館訪問	一七四
画文一致	一八〇
第六十六回芥川賞選評	一八四
第六十七回芥川賞選評	一八六
風信	一八八
型破り	一九〇
第六十八回芥川賞選評	一九一
未発表原稿を読む	一九三
志賀さんの生活	一九五
第六十九回芥川賞選評	二二七
精一杯生きた人	二二九
書生の心持	二三一
能の神様	二三五
未発表日記の校訂をして	二三八
本郷時代	二四四

篆刻と友だち	二四八
俳句ハ物体ヲ示ス	二五〇
老年	二五五
〔無題〕	二五八
第七十回芥川賞選評	二六〇
初暦の句など	二六二
少年の目と老人の目	二六四
第七十一回芥川賞選評	二六五
六平太翁の謡曲のレコード	二六七
ケヤキ冬木	二六九
白い障子	二七三
処女作「父」の回想	二八六
第七十二回芥川賞選評	二九三
鮎の友づり	二九五
第七十三回芥川賞選評	二九九
わたくしごと	三〇一
丁寧なひと	三〇三
第七十四回芥川賞選評	三〇六

志賀さんの声	三〇八
武者小路さんの絵と書など	三一五
いろいろのこと	三二一
芥川さんの置土産	三二八
第七十五回芥川賞選評	三三四
美しい大和の寺々	三三六
俳句と写生	三四一
志賀直哉の遺愛の能面	三四九
染井の能舞台	三五三
久しぶりの岐阜	三五七
素顔の文人・河東碧梧桐	三六三
第七十六回芥川賞選評	三八三
新道繁さんの画室訪問	三八五
三つの寄稿の事など	三八九
句集『初心』の序	三九三
初めての書の個展	三九六
第七十七回芥川賞選評	四〇〇
新鮮明快の俳句	四〇二

第七十八回芥川賞選評

四一九

「唐子群遊」と「手長足長」

四二一

芥川さんの作品など

四二五

芯の強いひと

四二九

芭蕉と蕪村の真蹟

四三二

第七十九回芥川賞選評

四三六

徐渭の水墨画

四三八

島田正治君の水墨画

四四一

芭蕉の晩年の句

四四三

アズキの味

四四九

第八十回芥川賞選評

四五二

編集後記

四五五

口絵 著者（昭和三十三年、馬瀬川）

隨筆

五

能の話

——『坂元雪鳥能評全集』——

劇評家の三宅周太郎が、今年の二月十四日に七十四歳で亡くなつたが、この人の長い年月、五十年にもわたる観劇の批評文は、いつも新聞に出て評判がよかつた。私は、芝居などあまり見ない方だが、三宅周太郎の劇評は、目につけば読んだものだ。七十年の生涯を観劇評に終始一貫したことは、芝居が好きなればこそだが、これを自身の使命として打込んで居たからよい批評文も書けたわけで、これは自他共に幸福と言はねばなるまい。三宅周太郎のこの多年の業績は、今年の日本芸術院の恩賜賞に推薦された。

私は、三宅周太郎の著書は手許に一冊もない。名著の『文楽の研究』が、昭和初年に中央公論に連載された時は読んだが、観劇評の著書も、私は所蔵しない。これは、私が芝居見物にさほど打込めないせゐだと思ふ。

私は、これに付けて、私の愛読書『坂元雪鳥能評全集』のことを書いておきたい。

坂元雪鳥といふ人は、雪鳥は雅号、本名は坂元三郎、明治十年に九州の柳河に生れて、帝国大学の国文科卒業、東京朝日新聞の編集部勤務、夏目漱石にも愛され、漱石の明治四十三年秋の『修善寺日記』には、坂元雪鳥の

名がしばしば誌るされた。坂元雪鳥は後年に法政大学教授、また日本大学教授。昭和十三年二月五日に六十歳、脳溢血にて急逝。

この坂元雪鳥は、東京朝日新聞に、明治・大正・昭和にわたる三十何年つづけて、毎月の能見物の能評を書いた。また、雑誌にも能評と能楽の評論隨筆を書いた。著書は『能楽論叢』『能楽筆陣』『謡曲研究』など刊行された。これは、雪鳥の新聞の能評と同じに、わかりやすく、テキパキした名文だ。すべて明瞭に実証具體の記述、いきいきした筆で、私は好きだ。

また、坂元雪鳥校註の『能楽史料叢書』が、謡ひ本の版元のわんや書店から刊行された。これは昔の江戸時代の能関係の覚書写本などいろいろの中から選出された史料。第一編は『お世話筋秘曲』（紀州獅子石橋しやくひうに就いて、八代將軍吉宗が紀州侯の能役者の徳田隣忠に石橋を再興させた事、その徳田隣忠のくはしい覚書。——私はこの『お世話筋秘曲』を読んで、この物語を歴史小説に書きたいと考へたこともあるが、戦争の最中で書けずに、この素材はまだ暖めたままだ。——）第二編は『隣忠見聞集』（能楽が江戸時代に入つて全盛期になる各流儀に關する、徳田隣忠の見聞秘話の覚書で、江戸時代の能の伝統がわかりやすく、逸話もあり、読むとなかなか面白い。）第三編は『豊高日記』（紀州侯の能役者ワキ方の藤田伊右衛門豊高の、六十年間にわたる覚書隨筆。これを讀むと、昔の能役者が寝てもさめても一心不乱に芸の一途に努めて、殊にワキ方なので謡ひの工夫に心を砕いて、六十歳七十歳の老後も向上に燃えて居るのに、私は感動した。——私は知己のワキ方の松本謙三に「この本を讀んでごらんさい」と『豊高日記』をしばらく貸したこともあつた。——）第四編は『隣忠秘抄』第五編は『隣忠秘抄外編』（この二冊共に徳田隣忠の能の秘事書留、江戸中期の名人たちの芸談の筆録。専門にわたる細かいもので、大方一般の興味の読物ではないやうだ。）第三編までは興味も深い。これらの能楽史料は、むかしの『世

『阿彌十六部集』などに似たやうなものが、江戸時代になると各流儀の能役者のおぼえ書の写本、また能の型付手付、観能手引書など版本も沢山あつたやうだが。坂元雪鳥は古びた写本のわかりにくい筆跡も丹念に解読して、面白相なものを原稿に写して校註して『能楽史料叢書』として順次刊行したが、昭和十三年二月に急逝してから、こんな根気仕事の後継者はなくなつたやうだが。

坂元雪鳥は、大学では国文学を講じて、よい弟子たちもあるやうだが、一生涯の仕事は、好きな能見物の能評だと私は考へる。

『坂元雪鳥能評全集』は、昭和十八年六月十五日発行の日付で、戦争の最中、七〇〇部限定菊判二段組五百八十頁の大冊上巻下巻（下巻はくはしい索引や跋文など百頁増大）一冊拾円で当時としては高価な書籍だが、戦争のはげしい物資の欠乏した最中で、この出版も非常な苦心で刊行されたものだ。私はこの本の広告を見て、すぐに九段下の電車通りの畝傍書房といふ本屋に、自分で、買ひに行つたものだ。その畝傍書房の店には、もとの中央公論の編集長の湯川龍造が店の主人と見えて、私の顔をおぼえて居て、私の買ひにきたことをよろこんだ。私は、下巻が出たら送つてくれと、下巻と共に二冊分の二十四出して、上巻一冊持つて戻つたが。この本の下巻は翌年になつて出来上つて、実にくはしい索引が付いて居た。能・狂言名、各曲小書キ一覧、各演者名など、永い年月に、どの曲は誰誰が上演したか、誰はどの曲とどの曲を舞つたか、すぐにわかる索引、これは雪鳥の弟子の若い学徒たちの協力によるもので、私はこれを見て、坂元雪鳥教授が弟子たちをよく導いたことも考へられた。

『坂元雪鳥能評全集』の能評は、明治四十一年二月から昭和十三年二月まで、三十年間の目ぼしい催能を欠かさずに見物した能評で、新聞と雑誌に出したもの全部を集録したものだ。これは、明治・大正・昭和にわたる、実証具体ありのままの能楽史とも言へるものだと思う。

坂元雪鳥は、少年時分から能見物に親しんで、明治の古老の、観世清廉、観世鍬之丞、梅若実、宝生九郎、金春八郎、宝生金五郎などの能も見て居た。この本には、明治四十一年からの能評が出て、この古老の能の評はないが、熊本から上京した名人の桜間伴馬・友枝三郎の能の批評はこの全集の中に見られるが、桜間伴馬は東京に移住して左陣と改めて有名だが、友枝三郎は余り知られないから、大正五年十二月十二日の喜多別会の能評をここに掲げる。

十年振の友枝翁

能楽喜多流家元六平太氏は今般の宮中御能に際し、熊本から友枝三郎翁を呼び迎へた。同翁は七十余の老人で、先々代の宗家で修行した唯一の人である。其絢爛の芸と清高の人柄とは深く斯界の尊敬を集めて居る。目が見えず、耳は殆ど聾して居るから近年舞台を退いて居たが、今度は特別で上京した。此機を利用して同翁の枯れ果てた妙技を是非見たいものといふ風流の人々の希望と、故老を遇するに厚き六平太氏の意見とで十二日喜多舞台に別会能が催され、友枝翁は「鉢木」を演じた。向き合つて立つてゐるワキやツレの謡が一句も聴き取れないといふ心細い耳を持つて居ながら気合も抜けず、終始凜々たる気込は実に感心させられた。ワキを喚止むる所、一散に破つて入る所など何とも言へぬ妙味があつた。後シテの豪宕さも偉いものである。記者は十年振りに同翁の技を見たのであるが、老人だからといふ為に型少にするといふ事はなく、時によつては六平太氏などより型が多いと思ふ所もある程で、同郷の左陣翁が芸の上で年が寄らないのと同じ趣だと考へた。そして此人の若い盛の頃は嚙派手なキビキビした芸であつただらうと察しられた。

六平太氏はお付合に「紅葉狩」を演じた。舞の替る辺など独特の妙味を發揮した。